

最終回

# 誰がこれを造ったのか

— 社会への責任、そして次世代へのメッセージ —

平成20年度 土木学会会長提言 より

第5回

平成20年度の土木学会会長提言で訴えた「土木技術者の無名性からの脱却（有名化）」を取り上げたこのシリーズも、今回が最終回である。第2回から4回は、二人ずつそれぞれの立場からこのことを論じていただいた。それによって議論はさらに深まり、展開にあたって考えなければならないこともより鮮明になった。お忙しい中、執筆を引き受けていただいた皆様方に感謝を申し上げたい。

## 土木構造物に銘板をつけよう

平成20年度土木学会会長提言特別委員会委員長 栢原 英郎

### テーマの発想

土木構造物の近くに、その建設に関わった土木技術者の名前を明らかにしようとする思いは、土木学会の会長となって突然思いついたものではない。昭和39年に大学を卒業して運輸省に奉職し、爾來45年間、一土木技術者として仕事を続けてきたその職場で、仕事を終えてから酒を酌み交わしながら繰り返し話題になったことであった。「建築家は名前が出るのに、なぜ土木技術者は名前が出ないのか、あるいは出さないのか。」

議論は常に、土木技術者の名前を明らかにして社会に認知させるべきだとする意見と、やや優勢な「無名性」、つまり影の存在こそ土木技術者のあるべき姿だという意見とが切り結び、しかし酒の席の議論の常でいつの間にか話題は別のことに移り、翌

日には忘れられていると言う繰り返しであった。

会長提言のテーマを考えなければならない段階で、このことを取り上げようと思った。識者に集まっていただき一度しっかりと議論をして、結論が出ないかもしれないが議論の内容と経過を報告書に書き留めておけば、次にはそれを発射台にして議論が一段高いところに進むのではないかと、酒の席で常に消えさってしまったエネルギーを固定化しようではないかと、そう考えてこのテーマを取り上げることとした。「良いテーマですね。何時考えたのですか」と問われることが多いが、その都度お答えをしている「酒を飲みながら思いついた」というのは、全くの冗談ではない。

### 議論の経緯

したがって、最初の目的は「土木技術者

を社会的に認知させよう」というものであった。土木事業や技術者が社会的に非難を浴びている現代こそ、その必要性は高いと考えた。また、「無名性は男のロマンであり、それこそ土木屋のあるべき姿である」という強い意見を意識して、検討は恐る恐るスタートしたというのが正直なところである。しかし第一回の委員会で、まず目的が大きく変わった。土木事業や土木技術者に対する社会の批判が高まっている現在、必要なことは社会に土木技術者を認知させることではなく、土木技術者が姿を現すことによって社会からの信頼を回復することではないかとされ、無名性は男のロマンどころか、社会からは姿を隠していると受け止められかねないとなった。さらに、ヒーローに憧れ、名前が出ない世界には魅力を感じない若い世代の心理を考えると、次世代を担う若者たちが構造物に感動すると同時に、そこに自分と等身大の技術者の存在を知って土木界の継承者となる志を持つことを期待することも、大切な目的ではないかということになった。

テーマが時代にかなっていることと内容の方向性に自信を持つことができたのは、平成20年9月11日に仙台市で開かれた土木学会全国大会の特別講演を終えた頃からである。「誰がこれを造ったのか」と題した会長特別講演は、聞いてくださった多くの方々、特に大学で教鞭をとっておられる先生方から強い支持をいただいた。また、この時の海外支部などからの参加者によるラウンドテーブルミーティング、さらには10

月30日に招待されて講演した大韓土木学会で、韓国も同じ悩みを抱えていることを知り、勇気付けられた。

## このシリーズから得たもの

さて、6人の執筆者の方々からは、報告書に欠けている視点をいくつかご指摘いただいた。斎藤公男前建築学会会長からは、建築学会も同じ課題に取り組んでいることをご報告いただくと同時に、我々が建築家（アーキテクト）のみに目が向き、構造家がいって初めて建築物が成り立つという意識が欠けていることを鋭くご指摘いただいた。不明をお詫びすると同時に、今後両学会が協力していけたらと思う。

「社会との対話が重要になったので姿を現す必要がある」（宮川豊章。以下敬称を略す）、あるいは「一般の人たちは、個人の名前が出ていないことに対しては安心感もてなくなってきた」（吉越洋）という指摘は、報告書がいう「社会に対する責任」に包含されているとしても、より適切に必要な理由を表している。歴史的な視点、国際化の視点から「有名化は我が国土木分野の質的転換のために必須の処方箋の一つ」（家田仁）というご指摘は心強い。一方、「大事なことは、誠実に、ひたむきにモノを造り続けること」（小林将志）という意見や、「無名性のロマンを支えるのは、個々の土木技術者の技術力や使命感であり、現場の一体感である」（池田龍彦）ということも有名化が進んだとしても忘れてはなら

ない事柄であろう。

## 実現を待ち望むもの ：銘板のイメージ

「無名性のロマンを堅持すべき」という議論や「有名化こそ推進すべき」という議論は、今後も続くであろう。意義があると考えた発注者、あるいは設計者や施工者が、ともかく銘板の設置をしてみただけだが、より良い答に近づく早道である、その意味から国土交通省が銘板の設置を仕様採択したことは、それが責任者の明示あるいは維持管理の便宜のためだとしても、大変心強く嬉しいことである。

関係したたくさんの技術者の中からどのようにして記名するものを選ぶのかという議論も、結論は出ない。最近、関係した全ての人物の名前を掘り込んだ石碑などの設置が見られるようになった。苦労をした

人々に感謝し顕彰することの意味は大きいし、そこに掘り込まれた一人ひとりのみならず家族にとっても大きな誇りであろう。しかし全員を記すことと、複数であっても代表者（実質的な責任者）を明らかにすることとは意味が違っているように感じる。

昨年評判を呼んだテレビドラマ「黒四ダム」の最終画面が忘れられない。主人公とその関係者が完成したダムサイトに集まってくる。そして岩壁に掘られた人々の名前を見上げながら語り合う。そこに彫られているのは、事故でなくなった犠牲者の慰霊のための碑である。土木の現場で見かける人の名がこれではあまりにも寂しいではないか。

最後に、委員会が頭に置いていた銘板のイメージを掲げておきたい。「実質的な」とは、現場で先頭に立った者といったイメージであり、その人が記されることにより、苦労した全ての関係者が自分も一緒に苦労したと納得できるような人を想定している。また、土木学会賞技術賞の推薦書の書式に、技術者明示の取り組みについて記述する欄を今年度から追加したことを付記したい。

### 銘板の記載項目

基本的な事項	事業あるいは構造物の名称
	完成時期あるいは工期
	事業主体名と代表者名
	事業あるいは構造物の目的
	事業主体の事業担当部署名 ・実質的な責任技術者名
	設計会社名 ・実質的な責任技術者名
選択的な事項	構造物などの技術的特長
	受賞・表彰歴

## コラム

### 深川林地—鉄道防雪林の名に込められた技術者の功績

東日本旅客鉄道(株) 東京工事事務所 次長 美谷邦章

日本において明治期以降、積雪地では冬の陸上交通の主役は鉄道であった。この冬季の鉄道輸送を支える鉄道林の造成に殉じた技術者の名が残された事例が北海道にある。

鉄道における除雪の手段は、線路内からは除雪車を用いるが、大雪や吹雪によるふきだまりはこの除雪能力を超え、長期間交通が途絶することがあった。地上設備としては線路際の柵や雪覆があるが、当時いずれも木製であり、強風による倒壊、吹き込みなどにより除雪は困難を極め、また蒸気機関車からの散火による延焼の恐れもあり、効果的な対策とは言えなかった。

鉄道林(防雪林)は、風上からの吹雪を弱め、林縁付近や林内に雪を堆積させて線路側に吹き溜まりを生じさせない機能を持っている。記録される最古のものはドイツにおける防雪林で1852年のものとされるが、こうした欧米の事例を参考に、1893年(明治26年)に東北線水沢駅・小湊駅間に日本で初めて防雪林が造成された。

北海道においても、1909年に函館本線で初めて防雪林が設置され<sup>1)</sup>、北方の宗谷線においても防雪林が計画されたが、特に剣淵・士別間の土壌は、過湿泥炭地のため樹木の生育に適さず周辺の防雪林は枯死に瀕している状態で、冬季の鉄道輸送に支障をきたしている状況であった。

この状況を打開すべく、1926年(大正15年)<sup>2)</sup>線路を保守する現地事務所の林業技手であった深川冬至(ふかがわとうじ)氏が、泥炭地植林の研究に着手した。氏は1897年(明治30年)<sup>4)</sup>愛媛県に生まれ、1916年(大正5年)に愛媛県宇摩郡立農林学校<sup>2)5)</sup>を卒業し、その翌年、鉄道院北海道鉄道管理局札幌保線事務所<sup>2)3)</sup>に採用された。当時誰もが泥炭地での植林を疑問視する中であったが研究に没頭し、10年後の1936年<sup>2)</sup>には成果を論文として発表するに至り、あわせて防雪林の造成も進めていった。困難を克服できた技術的な特徴は、湿地帯に強い樹種の選定、土壌改良、地下水位の低下法があげられるが、それを実際の成功に導いたのは、氏の職務に対する打ち込みようであり、極寒降雪の日も苗地を見回るなど、まさに仕事の鬼だったと伝えられている。結果として、その過労がたたりに、1943年(昭和18年)<sup>2)</sup>に45歳でその職に殉じてしまう。その同年、氏の功績を永久に記念するために、氏が永年手塩にかけた宗谷線剣淵・士別間に位置する鉄道防雪林<sup>2)6)</sup>を「深川林地」として氏の名を残す記念林地に指定された。さらに1966年(昭和41年)には、偉業を継承するため、みかげ石の鎮魂碑が剣淵1号林地に建立され、現在も氏が育てた林を見守っている<sup>4)</sup>。

当コラムの執筆にあたりご協力をいただいたJR北海道工務部工事課小川直仁氏に感謝いたします。

#### (参考文献)

- 1) 日本国有鉄道施設局：鉄道林における営林技術発達史(普及版)、昭和35年、p13、日本国有鉄道施設局
- 2) 宮原和雄：深川林地 故深川冬至を偲んで、昭和43年、旭川鉄道管理局施設部
- 3) 北海道鉄道百年史編纂委員会：北海道鉄道百年史 上、昭和51年、p378、日本国有鉄道北海道総局
- 4) JR東日本鉄道林研究会：鉄道林100周年記念写真集、平成5年、p92、東日本旅客鉄道株式会社
- 5) 愛媛県立土居高等学校 HP 沿革より
- 6) 小川直仁ほか：宗谷線剣淵・士別間鉄道防雪林に関する技術的特徴について、平成19年、土木史研究論文集Vol.26



写真 深川林地の碑